



## ＊ 研究会報告 ＊

「帝国日本」境界の祭祀再編と海外神社班 2020 年度研究会

# 海外神社データベースの更なる活用について

日時：2020 年 8 月 29 日（土）13:00～14:30

場所：Zoom 会議

加藤 里織（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程）

### はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大が続くなか、多人数が集まる会合やシンポジウム等のイベント開催が厳しい状況が続いた。各学会や研究会が中止や延期に追い込まれたが、その中でも何とか活動を継続できないかと、オンラインでの開催に切り替える動きが広がった。「帝国日本」境界の祭祀再編と海外神社班でも、オンラインでの研究会開催を模索し、2020 年 8 月 29 日（土）、クラウドコンピューティングを使用した WEB 会議サービスの Zoom を利用してオンライン研究会を開催した。初めてのオンライン開催ということもあり、一般には公開せず班内研究会となった。本研究会で報告された内容と報告者は以下のとおりである。

報告 1：「海外神社データベースの成果と今後の課題」

津田良樹（非文字資料研究センター客員研究員）

報告 2：「データベースの構築と更新の在り方について」

渡邊奈津子（非文字資料研究センター研究協力者）

本研究会開催のテーマとして、これまでの海外神社データベースの構築を通じてわかってきたこと、またデータの更新の課題等について、両氏による報告を行ったのち、『海外神社総覧（仮称）』のような紙媒体での整理と活用ができないか等の問題について検討を行った。両氏による報告内容について述べる前に、まず海外神社データベースについて簡単に整理する。

### 「海外神社（跡地）に関するデータベース」

「海外神社（跡地）に関するデータベース」は、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第 3 班課題 3（景観に刻印された人間の諸活動と災害痕跡）「海外神社跡地調査」組の研究成果のひとつとして構築され、2007 年に公開された。

本データベースは、海外神社に関する図面・調査表・現状写真と古写真・古絵葉書などの資料から構成されており、これら資料データ 1 点ごとに、神社名・社格・

地域・創立年・祭神・所在地・原資料付加文字情報・原資料内容・原資料所蔵者・出典・原資料種類・原資料記法・原資料サイズ・原資料撮影・作成などの情報が付されている。

2007 年の公開時点では、合計 103 社の跡地関係資料が収録されており、その後、2008 年、2009 年、2011 年と収録データの増補や改訂が行われた。最新の改訂は 2016 年に行われている。

2016 年最新版では、日本語表記に加えて英語表記のほか、ハングル語表記、簡体字表記、繁体字表記を加えて、5 カ国語の検索に対応できるようになった。また、台湾の古絵葉書を中心とした水町コレクション、宮大工の家に伝えられた造営関係図面である奈良の仲次郎家所蔵資料や柏崎の中山博迪家資料、内モンゴル興安（ウランフォト）にあった興安神社の造営時の貴重な生写真である高橋健家所蔵写真データの追加も行われた。しかし、これ以降、増補改訂は行われていない。

以上が、本研究会で検討されたデータベースの現況である。本研究会では、両氏の報告の後、約 9 名の参加者で討論を行った。紙幅の関係上、詳細な報告はできないので、以下、簡単に両氏の報告内容と議論の内容を紹介する。

### 発表の概要

報告 1：「海外神社データベースの成果と今後の課題」

津田良樹（非文字資料研究センター客員研究員）

津田良樹客員研究員報告では、これまでの研究蓄積を整理するにあたり、本データベースを活字化して紙ベースで残した方が良いのではという提案があったことを受けて、データベースと「繋ぐもの」として冊子化が検討され、以下のような『海外神社総覧（仮称）』構成案が出された。

『海外神社総覧（仮称）』構成案

『海外神社総覧（仮称）』は、海外神社のリストと各論を掲載した総覧である。

本総覧は、既存のデータベースと相互に関連させ、データベースに導入するという目的を持つ。

本総覧では、データベースに掲載されている従来の海外神社リストに訂正を加えるとともに、新たに見出したものも追加する。

ここで、海外神社リストの具体的な追加や訂正について、まず社格の項目再検討が必要になるのではという指摘があった。この再検討では、神社でない神社、営内神社、企業内神社などに加えて、正規ではない神社の追加についても言及があった。

また、追加項目としては、所在地の GPS 表示や参考文献、簡単な解説、それに神社各論等も挙げられた。

この構成案に対し、総覧作成についてはほぼ全員の賛成があった。しかし、総覧作成作業にあたる体制作りや、刊行時期などが課題として挙げられた。まずは海外神社リストに絞って作業を進めるということで一致した。

## 報告2：「データベースの構築と更新の在り方について」 渡邊奈津子（非文字資料研究センター研究協力者）

「海外神社（跡地）に関するデータベース」は、2016年度改訂版が最新の改訂となっており、先にも述べたように、従来の日本語表記に加え、英語表記・ハングル語表記・簡体字表記・繁体字表記の5カ国語での検索に対応し、国際化を目指したものとなっている。

海外神社の検索は、神社名や忠霊塔、地図のほかキーワードを使用した検索も可能になっており、資料画像ごとにIDが付与され、各項でその詳細を見ることができるとのこと。

現在、データの更新は、外部に委託して行っている。

データベースが作成された当初、その特色として「通常よく見られる所蔵資料を整理完了後に公開するデータベースと異なり、データを収集しつつ、順次公開していくという、常に変化発展していくデータベースであるという点」が挙げられ、「収集データを保留することなく、迅速に公開することを最重要視して」いたが、実際には、2016年以降更新はされていない。

これまで、内容の訂正やデータの追加を簡単にして更新をやすくするという課題が挙げられていたが、その作業を外部に委託しているため、作業が容易にできない状況にあった。

さらに当初の目的として、収集したデータを迅速に公開することを最重要視した結果、掲載されている情報が「必ずしも完成されたデータになっていない場合も」あるというように、原資料付加文字情報や原資料内容など、定義付けがされていない箇所もあり、作業者の判断に委ねられ解釈や表記の違いも生じてしまっている状況にある。

これらの課題を踏まえて、今後どのようにデータベースの再構築を行っていくのか、また、各研究員の成果や班全体の調査範囲の拡大に対応していくには、どのようにしたら良いのかを検討する必要があることを確認した。

本来、データベースとしては、調査者自身が内容を追

加訂正できるシステムになることが望ましい。しかし、それにはシステム自体を変える必要がある。また、研究班のメンバーに変更が生じた際など、データベースをどう継続していくか等の問題について指摘があった。

両氏の報告を受けた上で、本研究班では、まずは紙ベース（総論）の作成を出来るところから着手し、同時にデータベースの再構築についても議論を重ねていくこととなった。

データベース形態としては、今後、似たような範囲の研究が並んで連携できることや、相互に関連しながら研究の拡大を目指せるところまでを含めて、再構築を構想するのが望ましいという意見も出て、今後の課題が明確になった。

## おわりに

研究会のテーマは、先に述べたように、データベースの更新と紙媒体での活用を巡る諸問題の検討であった。

資料の検索において、デジタル化されたものと紙ベースでは何が違うのだろうか。デジタル化されたものは、「わかっている人」が調べる時に使い勝手がいいという利点がある一方で、初めての人には全体像がわかりにくい。一方で、紙ベースのものは、全体像がわかっていない初めての人に全体像を示すものであり、見取り図としての仕組みを持つのではないだろうか。

海外神社データベースは、過去写真の検索や関連論文を探す際には非常に便利で役立つものになっている。また、一般の人々がデータベースを参考にしてインターネット上で発信をしているものを見かけることもあり、基本的な情報をデジタル化した「成果」は出ていると考えられる。

更なる発展として紙媒体を用いた総覧作成が進められることになった。作成にあたり、対象とする地域を南から更に北へ（更に次のステップとして北海道や樺太まで視野に入れて）含めるのか等の詳細な内容や、誰が、いつ発行する等については、今後も検討を重ねる必要がある。また、同時進行的に、データベースでの収集データ順次公開と内容の改良について、今後も議論を重ねる必要があることを確認した。

Zoomを使用した初のオンライン研究会であったが、トラブルもなくスムーズに進行できた。物理的な距離を超えられるため参加しやすく、今後も小さな研究会であれば問題なく開催できそうだと、活動が活発化することも予想される一方で、参加者の気軽な雑談ができない等の問題点も指摘された。Zoomを利用したこの新しい試みを、最大限に活用できるようにすることが今後の研究活動にとって最重要課題である。